

道明寺の頃の矢代先生

谷田 関次 (お茶の水女子大学学長)

道明寺仮寓時代とでも呼ぶべき頃の道明寺文華館、ということはまさにその播磨時代であるが、この頃の矢代先生は、後に結実した現在の道明寺文華館の構想を育てながら、当時戦後の社会情勢の中で盛に動きつつあった美術品の中から名品の名に価するものを見出し買入れることに全力をそそいでおられた。

構想といえば、第一に道明寺文華館という名前そのものであるが、これには由来がある。戦時中、南京の首都博物館（外交部の所管で政府機関としての組織は文物保管委員会）が、自然部門の建物に物華館、美術・考古学部門に文華館と名づけていた。（文華という語は後漢書に典拠がある。）私はその美術部門ではたらいていたのだが、先生は当時こゝを訪れられてこの命名の仕方に「さすがに文字の国だねえ」と感心しておられた。その後昭和21年の初夏に私が帰国し

てこの仕事に加わることとなった時には、財団法人としての道明寺文華館はすでに発足していたので、文華館という名前が先生の一時の感興を惹いただけではなかったのだなと思ったことである。

道明寺は瀟洒な鐘樓門をそなえた境内に紅枝垂の相当の老木があったりして尾寺らしい風情を添えていたが、その客殿一棟が当初の頃の道明寺文華館の事務所であり、先生が来られた時の宿所であり、また私たちの宿舎でもあるという形であった。道明寺界限も昨今ではなかなか賑やかになったようだが、当時はなお河内道明寺と呼ぶのにふさわしい環境で、先生が使っておられた客殿の二階の窓の下には寺の地内の蓮池があり、その先は杏畑を越して仲津姫陵を見るのどかな、また小綺麗な風景であった。もっともこの蓮池には後に食用蛙が住みついて、例の大そうな声に悩まされることとなるのだ



道明寺客殿の二階の書斎にて

が。

当時、先生は月に一回、一週間位ずつ、大磯のご自宅から来られて滞在され、その間は小ぶりな紫檀の机を据え窓際に古びた籐椅子を置いたこの二階の部屋が書斎となったわけである。そしてその滞在中、或いはその前後に、京都、大阪、阪神間などの美術商を廻られたり蒐集家を訪れたりされた。その頃、道明寺から京都へ、また芦屋辺へというのは電車の便も悪く混雑することも多かったが、先生は実にまめに歩かれた。この間に美術関係の図書の立派なコレクションである淀の伊藤文庫も館に入ることとなり、客殿に続いた土蔵一棟が美術品の収蔵庫兼書庫の役目を果たすこととなった。乾山の夕顔の茶碗も、万暦五彩の壺（写真も、光琳の手箱もこうして集ってきた。そして夜など、ベルシャ絨緞を敷きゆったりしたソファをしつらえた階下の広間で、それらの品々を身近かにして先生の多彩なお話を伺ったものである。

前に言った二階の書斎で一日を過ごされる日には、きまって夕方の散歩という日課があった。これ

も前に書いたように、道明寺界限、当時は散歩にはまことに気持のよいところであった。いつも愛用の籐のステッキを携えて、かなり長い時間歩いておられた。そういう日常のことをいえば、当時先生は煙草を吸いすぎないように大分気をつけておられたようである。それにはなるべく手間をかけるようにしておくのがよいということで、二階の部屋には煙草を置かず、下の広間の卓上に置いて、一々二階から下りて来なければ吸えないようにしたりしておられたが、これがどの位続いたか、又どれほどの効果があったのかは覚えていない。

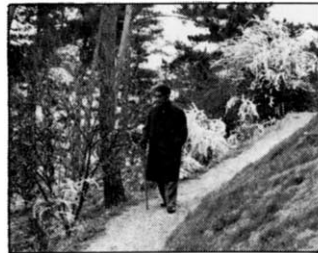
やがて昭和27年には、道明寺文華館は大阪市内に事務所と収蔵庫を持つようになり、第二の準備時代に入る。その頃から先生も来阪の折の宿を市内のホテルに求められるようになった。

先生の逝かれるひと月ほど前、たまたま荊妻がお見舞して道明寺の頃の思い出などをお話した時「昔のことをいろいろ話して下さって有難う」と言われたそうである。しみじみとした思いが深い。

五彩花鳥文小壺(大明万暦年製)



散歩される矢代先生 文華館にて



季刊 美のたより No.33

昭和50年 9月1日

発行 大和文華館